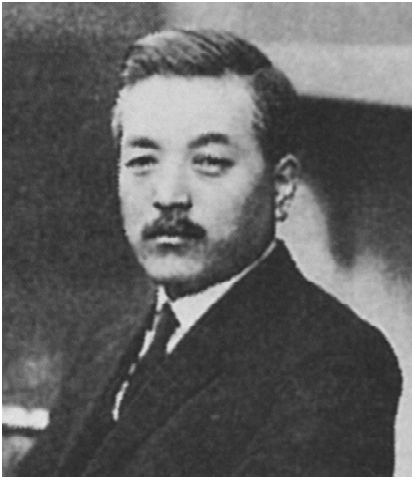


かわ さき や つね ぞう

川崎舎恒三

名古屋で三人目の工学博士

— 電気製鋼技術の進歩に尽くした恪勤精励の技術者 —



川崎舎恒三 (1886 ~ 1954)

出典：『東海カーボン100年史』

■誕生から帝大生、そして名古屋に来るまで

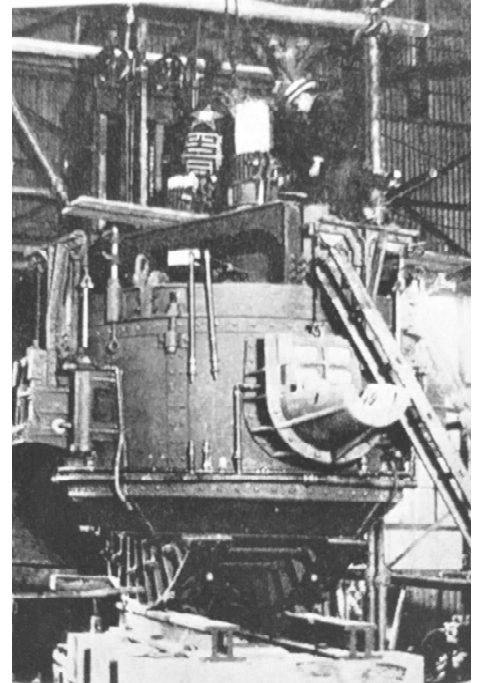
川崎舎恒三は1886(明治19)年に香川県高松市で男二人、女一人の末っ子として生まれた。高松中学に入学し、秀才の誉れ高く、第一高等学校に進学した。1907(明治40)年、東京帝国大学工科大学(現在の東京大学工学部)電気工学科に入学し、3年間学んで1910(明治43)年に卒業した。大阪の箕面有馬電機軌道(現在の阪急電鉄)に入社し、発電係長を経て電気課長になったが、1916(大正5)年に辞職して、高松に讀岐化学工業を起業した。東海電極製造(現東海カーボン)の設立にあたって、寒川恒貞の招きに応じて、川崎舎は1917(大正6)年暮に高松から名古屋に出てきた。寒川は同郷の先輩で一高の頃から面識があった。大阪時代に電気製鋼事業への参画を要請され、その時は実現しなかったが、二人の間には適当な機会まで待機する默契ができていた。

■炭素電極との格闘

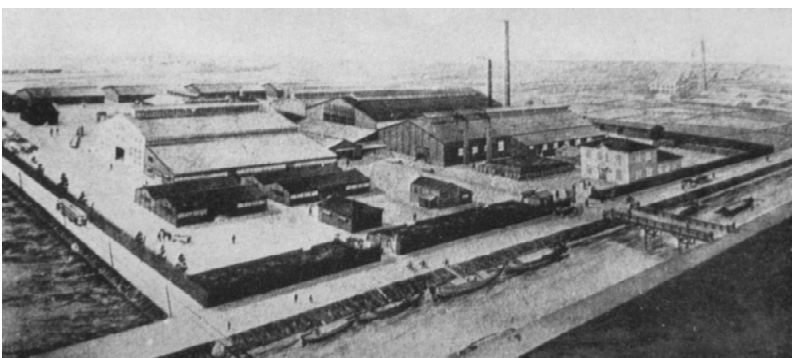
川崎舎は電極に関する海外文献を持ち帰った人を秋田鉱山専門学校まで訪ねてその写しをとったり、新潟県や北海道の企業の電極を比較研究するなど苦勞を重ねた。1918(大正7)年に東海電極製造が設立され、寒川は社長に、川崎舎は常務取締役で名古屋工場の初代所長に就任した。試作を繰返して天然黒鉛電極の生産を開始し、人造黒鉛電極製造の研究にも着手していたが、1920(大正9)年に兼務で電気製鋼所の取締役就任し、特殊軌条の研究開発を手掛けた。

■電気製鋼技術の発展に尽くす

1922(大正11)年に大同電気製鋼所が発足すると常務取締役として、もっぱら電気製鋼事業に取り組むようになった。大同電気製鋼所の社長は寒川で、本店は熱田工場におかれた。大同のアーケ炉製作は寒川による1.5トン炉に始まっていたが、多くの改良を加える努力が重ねられていた。川崎舎は寒川とともに社内に研究部を中心とする電気製鋼研究会を創り、1925(大正14)年に月刊誌『電気製鋼』を創刊した。本多光太郎が「題字」を贈り、会長の寒川が「発刊の辞」を寄せ、川崎舎の「電気製鋼に就て(其ノ一)」が巻頭を飾った。この連載を5回にわたって続け、他の研究論文も積極的に発表していった。これらを基礎にして川崎舎は学位請求論文「電気爐設計の原則」を東京帝国大学に提出し、1928(昭和3)年1月9日付で工学博士が授与された。3月4日付の『新愛知』は「名古屋で三人目の工学博士—川崎舎恒三氏—」と報じている。川崎舎は自動電流調整装置を1930(昭和5)年に完成させ特許を取得した。この装置をアーケ炉に併置して大同メタル式アーケ炉を完成させ、会社の



南満州鉄道へ納入した3トン大同メタル式アーケ炉 出典『大同特殊鋼100年史』



大同電気製鋼所熱田工場 (1926年)

出典『大同製鋼50年史』

定款の営業目的に電気炉製作工業を追加する変更を行った。1952(昭和27)年までに250基のアーケ炉が製作、販売された。川崎舎は1954(昭和29年)に亡くなるまで36年間を名古屋の地で過ごした。後半18年間は川上貞奴の旧邸に住んだ。それが移築復元され「文化のみち二葉館」として開館している。(黒田光太郎)